

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のもとで

未就学児施設における安全は、子どもがケガをしないようにすることではありません。そうではなく、まず、子どもの命を奪うべきことはできる限りなくす取り組みをすること。そして、職員の皆さんが安心して、子どもの育ちの後押しという大切な仕事をまっとうできるようにすること。それが安全の柱です。ここではその話をさせていただくわけですが、今回は保育の質と安全が交差する基本の話です。

保育士配置は、保育の質と安全の基礎

2020年12月2日、新潟県私立保育園・認定こども園連盟が、研究報告書『1歳児の保育士配置の検討(第2報)』4対1と6対1、3対1の比較及び関わり、見守りのシミュレ-

新潟県の「1歳児3対1」研究 にみる保育の質と安全

1

掛札逸美

KAKEFUDA Itsumi

心理学博士
保育の安全研究・教育センター

心理学博士(健康/社会心理学。専門は安全とコミュニケーションの心理学)。1964年生まれ。筑波大学卒。健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、NPO法人保育の安全研究・教育センター設立(2020年に任意団体化)。厚生労働省「平成27年度教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証委員等も務める。

シヨン』(2020年11月17日)を公表しました。^{*}当初から1歳児クラスの保育士配置を3対1としてきた新潟県ですが、財政状況ゆえに「国基準は6対1なのだから」(2019年)という流れが起き…。この3対1を守り、国の配置基準も1歳児3対1にしたいと、新潟県の皆さんと昨年取り組んでいる研究活動です。

はっきりしたことは、子ども6人の場合、保育者が言葉をかける子どもと言葉をかけない子どもの差がきわめて大きくなるという点です(3対1の最大差4・6倍に対して6対1は最大差18・7倍)。

実験には他の条件をそろえやすい昼食中の10分間を用いています。1歳児クラスの昼食というのは…? 「1歳児」と言っても、成長発達が一人ひとり大きく異なる、毎日育っていく(変

化していく)、食事の内容もそれぞれ違う、咀嚼・嚥下もまだまだ練習中、そのうえ、誤嚥窒息のリスクを上げる「急に泣き出す」が起こりやすい時期でもある。

この子どもたち6人の食事を保育者1人で介助するのは、至難の技です。より介助を必要とする子どもに手と目と耳を取られ、視野の外にいる子どもが保育者に向かって声をあげても聞こえません。手を差し出しても見えません。映像を見れば、一目瞭然。自分のビデオを見返した新潟県の保育士さんたちが、「(6対1の時は)アピールしている子どもを無視していた!」とシヨックを感じるくらいです。結果、いわゆる「手のかからない子どもたち」は、ほとんど一人で食事をしていることになりました。

この国は、未来をないがしろにしている

食事は、人間が五感すべてを格別に働かせる場です。この時に、子どもが感じている一つひとつをおとなが受けとめ、子どもが感覚をさらに味わえるように促すことは、身体を育てる以上に脳(認知、非認知、感情)を育てていきます。私は成長発達の専門家ではありませんが、『3000万語の格差—赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ』(明石書店、2018年)の訳者として学んだ知識からだけでも、この時間の大切さは断言できます。

その貴重な場所で、1歳児が、たとえば10分間あたり10回ぐらいしか言葉をかけられないとしたら?

「手のかからない子」ですから、保育者も保護者も気にはしないのでしょうか。子どもも、「もっと話して!」「どうして私/僕のほうを見てくださいの?」とは言いません。でも、この子たちは育つ機会を逃しています。もちろん、家庭でゆったり、時間をかけて家族と食事をしていればよいのでしょうか。ところが日本は、保育システムがある国の中でも異常なほど長時間、未就学児を施設が預かっているのです(OECD「経済協力開発機構」、EUの平均は週30時間*。

保育現場で長年働いてきた人たちは、過去数十年間で「子どもの姿が変わった」と言います(「親心を育む会」の研究*)。長時間労働を支える超長時間保育。家庭の時間がなくために増える保護者の要求。保護者支援や医療的ケア児の保育など多機能化の中で増える業務。職員の疲弊。人手不足と質の低下。こうしたことから帰結する安全の基盤の弱体化。にもかかわらず、1歳児については約50年間、変わらない保育士配置。この国は、未来(今の子どもたち)のことなど考えず、未来を育てる専門家の重要性も認めていないかのようです。国が今、すべき行動は何なのか。新潟県の研究の結果からは明らかでしょう。

安全と安心、成長発達の天秤を考える

この連載では当面の間、新型コロナウイルス感染症も取り上げていきたいと思えます。健康、安全の話として重要ですが、もう一つ、やはり成長発達という側面でも見逃せないからです。

新潟県の検討では、2019年よりも2020年、同じ条件下で保育者の言葉かけが7割に減るといふ、思いがけない結果が得られました。唯一考えられる減少の理由は、職員がマスクをしていることによる話しづらさです。春先からずっと、「おとなが布マスクをしていると食事の時、子どもたちがもぐもぐをできない」「マスクをしていると子どもの反応が薄い」といった声は聞こえていましたが、今回、それが数として見えたのかもしれない。これもまた、安全/健康と、安心と、子どもの成長発達をどう天秤にかけるか、です。

リスク・ゼロを目指すことで、価値を極端に下げてしまうことすらあります。安全/リスクは、常に価値と背中合わせ。未就学児施設の保育・教育の価値という視点から考えていきたいと思えます。

*いずれも「3000万語の格差」と関連情報↓「関連情報」に掲載

https://kodoinfo.org/others_main.html